

# 中原中也

◎特集

追悼・伊藤拾郎氏

◎特別寄稿

特別展『中原中也展～汚れつちまつた悲しみに…』

仙台文学館 学芸員 赤間亜生

◎新収蔵資料

「療養日誌」

「竹田鎌二郎日記」

「末黒野」

◎企画展

『丘の上サあがつて——中村古峽と中原中也』

◎特別展

『二つの中也の首——彫刻家・高田博厚の極限のフォルム』

平成14年度行事記録

第8回中原中也賞受賞作品

平成15年度行事予定



*Chuya Nakahara Memorial Museum*

中原中也記念館

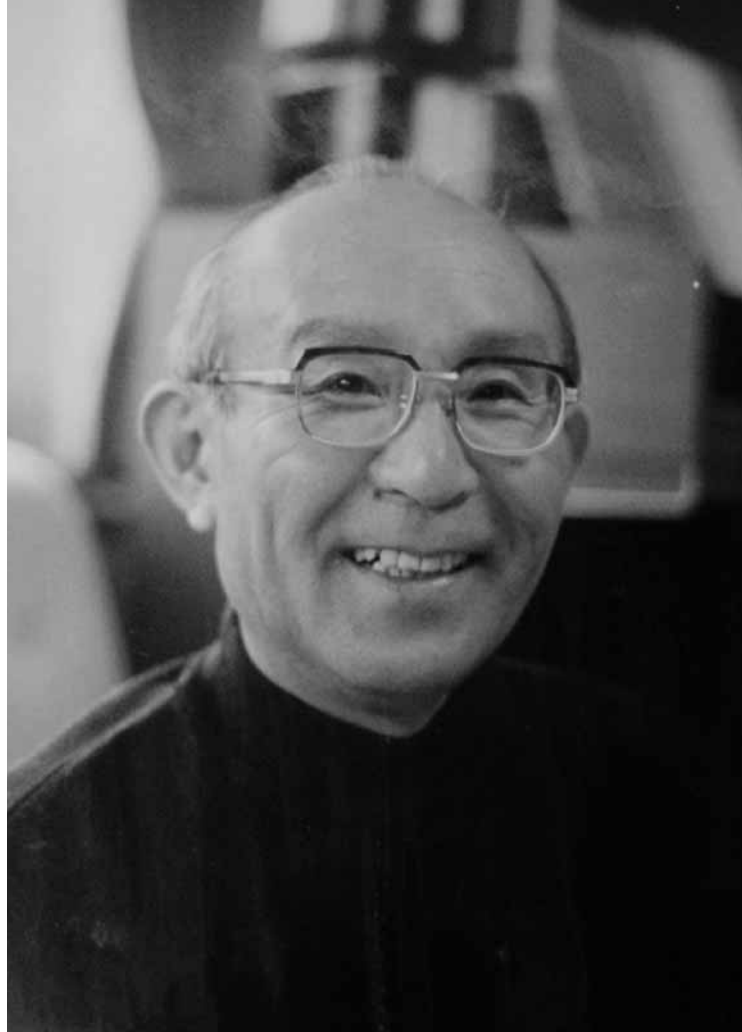
館報2003

8

*Public relations magazine*

第8号

# 追悼・伊藤拾郎氏



中也の末弟・伊藤拾郎氏が、平成15年3月19日、心筋梗塞で亡くなりました。拾郎氏は、中也没後66年を生きて、「兄様」としての中也を語りつづけてこられました。奔放に生きた兄中也に反発を感じることもあったと思いますが、どこか中也を思わせる飄々とした性格の氏が語られた思い出の数々は多くの人を惹きつけました。また、幼い頃からハーモニカに親しみ、晩年には本格的に練習に取り組み、プロのハーモニカ奏者としてデビューし、単独でコンサートを開くなど、芸術家としての一面も世に示しています。「冥福を心からお祈りします。」



中也生誕祭「空の下の朗読会」平成10年4月撮影

## ” 兄様 “ 中也

伊藤拾郎氏（旧姓中原、昭和25年に遠縁の伊藤家と養子縁組）は、中原医院を営む父謙助と母フクの六男として大正7年2月13日に、中也、亜郎、恰三、思郎、呉郎に続く6人兄弟の末子として誕生しました。

11歳年上の中也は、兄弟の中でも「兄様」と呼ばれ、長男として別格に扱われていたといえます。拾郎氏が6歳のときには、中也は県

島泰樹氏の招きに応じ数々のコンサートやミュージカル「42丁目のキングダム」に出演、CD「雪の宵」を発売するなど年齢を重ねることに活躍は輝きを帯び、哀愁を帯びた演奏で多くの人を魅了しました。

文也と拾郎氏  
市ヶ谷の中也宅に下宿していたころ



立山口中学を落第し京都の立命館中学校に転校しており、すでに郷里を離れていました。しかし、時折ふらりと山口に戻ってくる中也の様子が拾郎氏の記憶に鮮明に残っていたようです。また、拾郎氏は早稲田大学に進学するために上京し、市ヶ谷の中也宅にしばらく居候していたこともありました。

早稲田の受験で吉して約八カ月ぐらゐの中也の市ヶ谷の家に寄宿していました。(中略) 早稲田の試験がすんではおじめて中也が、「東京で一番景色の良いところへ連れて行ってやろう。」と東京見物に連れて行ってくれたのが、浅草、隅田公園のぼんぼん蒸気の出るところ、川の内こう岸に四メートルもあるうかという大きな「サッポロール」の看板があって、公園のベンチに腰かけて、「ここが東京で一番良いところだ。」

「この夕方の景色が一番奇麗だ。」と私はボカンとして、その風景を眺めていました。「中原中也生誕90 2年祭」パンフレット「インタビュー」伊藤拾郎氏より）

拾郎氏が思い出す兄の横顔は、山口に帰省してくる中也と市ヶ谷時代の中也が中心となりますが、長兄として振る舞う中也への反感とは背中合わせにサーカスに出てくる「ピエロのような哀愁」（同インタビューより）という印象が常に心から消えることがなかったと語っています。

## ハーモニカに生きる

一方で、拾郎氏の人生は常にハーモニカとともにありました。氏とハーモニカの出会い

は、ピアノを習うことに反対した父が代わりに与えた1本の複音ハーモニカでした。兄たちが奏でる音色に魅せられ、少年期、青年期を通して演奏に熱中。やがてプロ奏者を志しますが、「中也のような人生を歩ませたくない」という母・フクの言葉で断念。しかし、朝日広告社に勤務し堅実なサラリーマン生活を送りながらもハーモニカを忘れることができず、その想いを断ち切るうと何度かハーモニカを海に投げ捨てようとしたというエピソードも残っています。

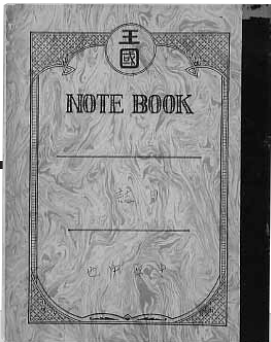
氏が再びハーモニカと真剣に向かい合ったのは、定年退職後のことでした。本格的な練習は、1日に30分から多いときは6時間にも及んだといえます。昭和56年に国際ハーモニカテープコンテストで優勝。昭和61年には中原中也没後50年記念行事の碑前祭で「朝の歌」朗読の伴奏を担当しました。また、歌人・福

## 伊藤拾郎氏 略年譜

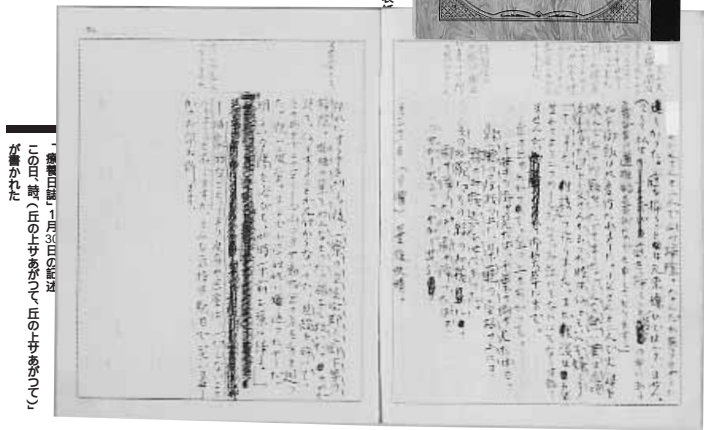
大正 7 年	0 歳	2月13日、中原謙助・フクの6男として誕生
大正 14 年	7 歳	この頃、兄たちの吹くハーモニカの音に魅せられる。兄思郎に手ほどきを受けてハーモニカに熱中
昭和 3 年	10 歳	父謙助の死により家屋を知人の医師に貸し、一家で萩に移転する
昭和 6 年	13 歳	一家で萩から山口に戻る
昭和 10 年	17 歳	山口中学卒業
昭和 11 年	18 歳	3月、早稲田大学受験のため上京、市ヶ谷の中也宅に居候する。戸塚の下宿へ移った後も中也宅に遊びに行く
昭和 16 年	23 歳	早稲田大学政経学部経済科卒業
昭和 17 年	24 歳	山口の42連隊に歩兵として入隊
昭和 19 年	26 歳	当時本土最南端の防衛基地だったマールス島(南鳥島)に赴く
昭和 20 年	27 歳	復員
昭和 21 年	28 歳	兄呉郎が開業した中原医院の事務員となる
昭和 23 年	30 歳	山口地方裁判所に就職
昭和 25 年	32 歳	遠縁にあたる伊藤家と養子縁組
昭和 26 年	33 歳	山口地方裁判所退職。呉郎を頼って長崎へ
昭和 27 年	34 歳	長崎市失業対策事業に就労
昭和 28 年	35 歳	朝日広告社に入社
昭和 36 年	43 歳	同社長崎事務所長就任。以後福岡出張所長・佐世保支社長・大分支社長を歴任
昭和 52 年	59 歳	朝日広告社を定年退職。山口市吉敷に転居し本格的にハーモニカの練習に取り組み
昭和 56 年	63 歳	国際ハーモニカテープコンテスト(複音の部)において「荒城の月」の演奏で優勝
昭和 61 年	68 歳	中原中也没後50年記念行事の碑前祭で「朝の歌」朗読の伴奏を担当
平成 3 年	73 歳	「福島泰樹短歌絶叫コンサート」に出演。以後、東京での演奏活動が始まる
平成 4 年	74 歳	渋谷ジアン・ジャンで初めての単独コンサート「伊藤拾郎ハーモニカコンサート 兄・中也に捧げる。」を開く
平成 5 年	75 歳	布施明主演のミュージカル「42丁目のキングダム」に出演。CD「雪の宵～わが兄・中原中也、思郎、呉郎に捧げる～伊藤拾郎ハーモニカの世界」月光の会」発売
平成 7 年	77 歳	「伊藤拾郎ハーモニカコンサート 雪の宵」を開く
平成 15 年	85 歳	2月、妻喜久子死去。 3月19日、心筋梗塞のため死去



# 療養日誌



中原中也 療養日誌表紙



「療養日誌」1月30日の日記  
「丘の上サあがつて」のサあがつて」が書かれた

「療養日誌」は、中也が千葉市千葉寺町の中村古峽療養所（現・中村古峽記念病院）に入院していたときに使用した日記帖です。

昭和11年11月10日に長男文也がわずか2歳で病死。そのショックで中也は神経衰弱をわずらい、翌12年1月9日にこの療養所に入院しました。当初は精神科の大部屋の患者として収容され、2月1日に神経科の個室に転室し、2月15日に退院しています。この日記は精神科にいた時期の後半に当たる1月25日から1月31日の一週間に渡って記されたものです。

療養所院長・中村古峽は、作業訓練を中心に出時としては画期的な治療を実践しており、その治療の環として、療養所の全患者に日誌を書かせ、回収した日誌に毎日目を通し、批評や説得を書き込んで、患者の手元に返していました。中也の「療養日誌」も、療養所から配付されたノートを使用したものです。大学1年の表紙には中也の字で「日誌」とのみ記されており、中を開くと万年筆で記された中也の記述に対し、古峽が赤色のペンで傍点や傍線、コメントなどを随所に書き添えています。

中也の記述は、自身の症状についての回想や、作業療法の感想などがほとんどですが、その中で目を惹くのは、1月30日の日記です。久しがりに病室から外に出て作業で汗を流し、「なんだか夢のやうに嬉しかった。庭を掃くことは元来嫌みではございません。」と感想を述べた後、「（但し）（？）（？）作りました。まだ理詰りは小生生れてより二つめくららにてお話にもなにもなりは致しません。御笑草にまっ、（？）一篇の詩を記しているのです。

丘の上サあがつて、丘の上サあがつて  
千葉の街サ見たは、千葉の街サ見たは、  
栗庁の屋根の上は、栗庁の屋根の上は、  
緑のお椀が一つ、ふせてあつた。  
そのお椀に、その緑のお椀に、  
雨サ降つたは、雨サ降つたは、  
つやが！出る、つやが！出る。

「上サ」「降つたは」といった千葉の方言を取り入れたこの詩は、野外作業を行っていた療養所の小高い丘の上（道修山）から千葉の街並みを見渡したときの開放感から生まれたものです。「療養日誌」、そしてその日記に書かれたこの詩の発見は、それまで暗く捉えられがちだった療養生活への見方を大きく変えるものでした。

また、この詩をよく見ると、古峽が赤いペンで傍点を付け、上段に「栗庁舎のお椀は面白い見つけ所と思ひました。」というコメントを書き加えていることに気がきます。古峽は青年時代に夏目漱石の門下で小説家を志していたことがあり、その古峽と中也の文学的な接点を示すという点でも、この日誌は貴重な資料といえるでしょう。

この日記帖は、平成11年3月、日本大学教授・曾根博義先生が、中村古峽記念病院に保管されている古峽の遺品の中から発見されました。中村古峽記念病院理事長・中村周二氏のご好意により、この度中村古峽記念病院よりご寄贈いただき、記念館で大切に保管していくこととなりました。

作の心と「春日狂想」の詩を壁一面に展示しました。

愛するものが死んだ時に、  
自説しなげありません。

愛するものが死んだ時に、  
それより他に、方法がない。

けれどもそれぞれ、業（？）（？）が深く、  
なほもながらぶ（？）（？）もつた。

奉仕の気持ち、なる（？）（？）なです。  
奉仕の気持ち、なる（？）（？）なです。

というフレーズで始まるこの詩に、文也の死、中村古峽療養所への入院など様々な出来事を経て結実していった中也の詩世界を来館者の方に感じ取っていただけたらと思います。

## 企画展

Kokeyo Nakamura and Chuya Nakamura

# 丘の上サあがつて 中村古峽と中原中也

平成14年10月30日から11月24日に開催された企画展は、新資料「療養日誌」を中心とした中村古峽の生涯と中也の晩年を紹介しました。監修は、「療養日誌」を発見した曾根博義先生と、新編中原中也全集編集委員の佐々木幹郎先生にお願ひし、初日のオープニングセレモニーでは、中村古峽記念病院の石川三知代氏、中原家（遺族の中原美枝子氏を招き、合志栄一市長、福田百合子館長とごまにテープカットを行いました。

### ● 展示Ⅰ——中村古峽の軌跡

ここでは、療養所院長・中村古峽（1881～1952 本名・藤（ゆ））の前半生を紹介しました。

日本精神医学会を創設し、機関誌「変態心理」の刊行や、フロイトやユングの理論を紹介するなど、日本における心理学・精神医学

の黎明期を担った古峽ですが、かつては小説家を志す文学青年でした。東京帝国大学英文科を卒業後、東京朝日新聞社に入社。夏目漱石門下の小説家として出発し、朝日新聞に連載された長編小説「殻」で高い評価を受けましたが、その頃より次第に文学を離れ、心理学の研究を始めます。

ここでは、森田草平や生田長江ら友人と高文科時代に発行した回覧雑誌「タツ」や、漱石から贈られた署名本など、文学史上でも貴重な資料とされる古峽の青春時代の遺品を展示しました。

### ● 展示Ⅱ——中也の療養生活

次に、中村古峽療養所の中也の療養生活を紹介します。

中也が入院した当時の中村古峽療養所は開設から四年目を迎え、できるだけ薬を使用せ

### ● 展示Ⅲ——在りし日の歌

昭和12年2月15日に中村古峽療養所を退院した中也は、文也の思い出が残る東京市茗荷谷の自宅を去り、鎌倉寿福寺境内に転居しています。山口への帰郷を考えていた中也は、9月に第一詩集「在りし日の歌」の編集を済ませ、原稿を小林秀雄に託しましたが、結核性脳膜炎を発病し、10月22日に鎌倉養生院で急逝し、中村古峽療養所を退院してからわずか8ヶ月後のことでした。

ここでは、中也と古峽のそれぞれの晩年、平成11年に「療養日誌」が発見されたときの新聞記事などを紹介するとともに、晩年の傑



テープカット  
左より中原美枝子氏、石川三知代氏、  
合志栄一市長、福田百合子館長

1937年、30歳で夭折した中原中也―

没後60年を経た今日、その詩はさらに輝き、愛誦されつづける。角川版旧全集を全面改訂、30年ぶりの本格的・新編「定本」全集！

## 新編 中原中也全集

全5巻+別巻1

【編集委員】

大岡昇平・中村稔・吉田熙生・宇佐美斉・佐々木幹郎



各巻、前例のない画期的二分冊構成

「本文篇」=厳密な校訂による新本文の確定  
「解題篇」=各作品の成立・推敲過程を詳述

- 第1巻 詩Ⅰ  
\*(第1回配本)新発見詩篇2
- 第2巻 詩Ⅱ  
\*(第3回配本)新発見詩篇2
- 第3巻 翻訳  
\*(第2回配本)新発見散文3
- 第4巻 評論・小説  
(第5回配本)新発見「療養日誌」新書簡31
- 第5巻 日記・書簡  
\*(第4回配本)新発見「療養日誌」新書簡31
- 別巻 (上)写真・図版篇  
(下)資料・研究篇  
(第6回配本)初公開資料多数

\*印既刊

造本

四六版・並製・カバー装・美装貼函入  
各巻「本文篇」「解題篇」二分冊(分売不可)  
予価 本体7,800円~9,500円(税別)

2000年3月より刊行開始  
第1巻・第2巻・第3巻・第5巻 発売中

角川書店  
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3  
TEL03-3238-8521 FAX03-3262-7734

new collection no.3



「末黒野」とアルバムを寄贈される和田健氏(左)と  
福田白百合館長

## 末黒野

平成15年1月30日、中原中也記念館常設展示室において、山口県詩人懇話会顧問を務めておられる詩人・和田健氏から、歌集「末黒野」と、昭和40年に山口市内・高田公園に設置された「帰郷」の詩碑の除幕式写真などをまとめたアルバム1冊をご寄贈いただきました。

「末黒野」は、中原中也と宇佐川紅秋(本名・正明、別号・山川千冬)、吉田緒佐夢(本名・理、別号・翠泡)の3人によつて大正11年に出版された私家版の合同歌集で、中也の文学的出発点といえる貴重な資料です。

中也が短歌を始めたのは、山口師範学校附属小学校5年生のときに出会った師範学校教生・後藤信一の影響でした。6年生のときには、雑誌「婦人画報」に投稿し、次選として入選、さらに県立山口中学に入学した大正9年には、ますます作歌に熱中し、山口県の

地方紙「防長新聞」歌壇欄の常連投稿者として名を連ねるようになります。「防長新聞」の若手記者だった吉田と、中学の上級生にあたる宇佐川と知り合ったのも、同紙主催の短歌会を通してでした。「末黒野」は、元々、吉田の「木蓮集」と宇佐川の「銀杏集」のみを収録して刊行される予定でしたが、宇佐川の歌数が少なく1頁半の余白ができたために、中也の28首の歌が「温泉集」として収録されることになったのです。

中也が後に「詩的履歴書」で、少しは売れた」と記しているように、当時「末黒野」の頒価は二十銭で、県外からの注文もあり、好評だったといえます。しかし、今日現存が確認されているのは和田氏が所有されていた1冊のみでした。戦後知人からこの歌集を譲り受け、大切に保管してこられた氏は、今回の寄贈について、「米寿記念として寄贈しました。帰るべきところに中也が帰ったという感じ」と話しておられました。

new collection no.2



竹田鎌二郎日記

## 竹田鎌二郎日記

中也と親交のあった竹田鎌二郎のご子息・竹田慶氏より、竹田鎌二郎が生前に綴った日記帖11冊をご寄贈いただきました。この資料は、昭和53年、竹田家の天井裏から発見されたものです。以前より記念館にご寄託いただいていた鎌二郎宛中也書簡、鎌二郎宛青山二郎書簡、青山二郎の「山羊の歌」表紙裏下書簡なども、同じく天井裏から発見されたものですが、この度これらの資料も、日記帖とともに寄贈いただくことになりました。

竹田鎌二郎(1901~1972)は、麻生中学校を経て早稲田大学に進学しますが中退。報知新聞社に勤務後、昭和7年夏頃から同9年7月まで四谷区番衆町8番地で喫茶店「樺」を経営していました。自由な生活を送り、木版画彫刻師、刷り師である一方、小説家を志望していましたが、世に出る機会には恵まれませんでした。

骨董蒐集家の青山二郎とは、中学以来の親友で、中也との出会いは、青山を介してでした。昭和6年5月5日の日記帖には、青山の家を訪ねたところ、「新しい人ひとり居た。天才のよし。」とあり、中也を「天才」と表していますが、同月19日の記述には、「青山へ寄る又中原居る。あいつはあれぎりしか偉くならない奴ではあるまいか、将棋は大物云いになり。」とあり、鎌二郎の中でも中也への評価が揺れていたことが伺えます。

その後、中也はよく鎌二郎の家に遊びに行き、鎌二郎も中也に親しみました。昭和8年12月に中也が結婚し、青山が住む四谷区花園町の花園アパートに引っ越してからは、青山や大岡昇平らと文学談義をやりあったり、毎日のように連れ立って歩くようになったりするなど、中也の名がしばしば日記に登場するようになります。日記には、「中原来て夜まで、中原に居られるのも嫌、帰られるのも嫌、変な心持です。中原帰へつたら当分変な心持、中原に済まめと云ふ心持なり(昭和9年10月8日の記述)」と、素直な心持が綴られています。

中也に関する記述は、中也の長男文也が病死し、そのショックで中也が入院するあたりで途切れてしまっていますが、鎌二郎の日記は、若かりし日の文学者たちの姿を実に生き生きと写し取っているのです。



【新収蔵資料】





昭和5年作中原中也像

特別展

# 二つの中也の首

## 彫刻家・高田博厚の 極限のフォルム



「中原中也展 汚れつちまつた悲しみに...」  
展示室

特別展

# 「中原中也展

## 「汚れつちまつた悲しみに...」

仙台文学館  
◎学芸員 赤間 亜生

仙台文学館は、平成11年3月の開館以来  
宮城・仙台ゆかりの文学に関する資料  
の継承・保存とともに、地域の文学活動の拠  
点となることをめざし事業を進めてきました。  
現在は、土井晩翠・島崎藤村など、郷土ゆか  
りの文学者を紹介する常設展示のほか、年に  
五回の特別展及び企画展を開催しています。  
特に毎年春と秋に開催する特別展は、郷土の  
枠にとらわれず幅広いテーマで展示を開催し  
てきました。

平成14年度秋の特別展では、9月7日から  
10月20日まで、「中原中也展『汚れつちまつた  
悲しみに...』」を開催しました。中原美枝子氏

と中原中也記念館には、展示資料を始め、様々  
な面で多大な協力をいただきました。会期  
中は五、三三九人の観覧者を数えましたが、  
十代、二十代の年齢層が多かったことも特徴  
的でした。

展示は、中也の生涯、中也詩の世界、中  
也の交友、の三つのテーマで構成しました。  
普段見られない中也の自筆原稿や日記・書簡  
を、来館者の方々は興味深く観覧してしまし  
た。また今回、神奈川近代文学館にも協力  
頂き、旧制二高に学び、仙台に縁の深い宮永

太郎の手帳や書簡・絵画・原稿などを展示し  
ました。中也に大きな影響を与えた天折詩人  
の存在を初めて知り、興味が湧いたという反  
響も少なくありませんでした。

今回の展示の大きなならいは、来館者の方々  
に、中也の詩の魅力に出会うて頂くことにし  
た。この展示を見た後、もう中也の詩を読  
みたい、と思ってしまう。そのため、資料展  
示の他に、中也の代表的な詩を引用したデザ  
インパネルの展示や、朗読CD及び詩と風景  
をあわせたイメージ映像（職員製作）を流す  
などの工夫をしました。さらに展示室のみな  
らず、会期中は館全体を、中也一色に染めよ  
うという事で、館内のいたるところに、詩  
のパネルを展示しました。会期終了後、この  
パネルを希望者にプレゼントするという試み  
を行ったところ、八十枚程のパネルに対して  
三百人の方々から応募が寄せられて抽選とな  
ったには、職員一同驚きました。

また、地元の書店とタイアップし、展示の  
告知を兼ねて、中原中也関連書籍のブックフ  
エアを会期中に組んだところ、同書店の新潮  
文庫・中原中也詩集が、その時期の文庫売  
り上げベスト10にランクインしたことも思い  
がけない出来事だ。現代に生きる中原中也の  
魅力を改めて認識しました。いづれにしても  
展示を見た人たちが、その後中也の詩をさら  
に深く読み味わってくださるとしたら、これ  
ほど嬉しいことはありません。

展示室でご紹介した詩のパネルの一部は、  
今、中原中也記念館に展示されている「S」  
とですが、仙台文学館で開催した中原中也展  
の痕跡が、その故里で生き続けているのを、  
展示を担当した者として、心から嬉しく思っ  
ています。

### 彫刻家であり中也の友人であった 高田博厚（1900～1987）

をあてた特別展を平成14年7月31  
29日にかけて開催しました。監修は  
郎先生（新編中原中也全集、編集  
お願いしました。

中原家が所蔵されている「中原中  
新しく館蔵資料に加わった「古在由  
そして福井市美術館が所蔵する「高  
像」「佐藤春夫像」「宮沢賢治像」「  
太郎像」「ロマン・ロラン像」といった  
の人物像の代表作7点とともに、高田の生

と作品の世界を紹介しました。



編入学を薦めたのも高田でした。

昭和5年、高田はアトリエで中也をモデル  
にして小さな肖像を制作し、翌年単身でフ  
ランスへと旅立ちました。第二次世界大戦下の  
動乱をヨーロッパで生き抜き、高田が再び日  
本に戻ったのは昭和32年。既に中也は故人と  
なり、中也の肖像も行方不明となっていまし  
た。翌年、高田は残された肖像の写真を頼り  
に再び中也像制作に取りかかったのです。

和5年に制作された中也像は、現在では  
萬七が撮影した写真でしか確認するこ  
きません。しかし、この写真と、昭和33  
改めて制作された中也像とを見比べてみ  
ると、この二つの頭像はどこか面差しが異な  
ります。

田は単に外形だけを形づくめるのではなく、  
しるしつけられている精神をも形づくめる  
の芸術家です。彼は指で思索する「と、  
ロマン・ロランが賞賛したように、つく  
は壊すことを幾度も繰り返し、粘土との

# 中原中也研究 第8号

発売中



入沢康夫  
お太鼓叩いて  
出口裕弘  
謎は深まるほうがい  
加藤周  
中原中也と高田博厚

特集 宮沢賢治と中原中也

対談 いいたも 中村稔

「銀河鉄道の夜」と「夜汽車の食堂」  
をめぐって

「軍中討議」  
入沢康夫 北川透

「心象スケッチと名辞以前」  
藤原泰正

「小説家 中原中也・故郷と信仰」  
藤原泰正

近代文学とキリスト教

定価 2,000円(税込)

問い合わせ 中原中也記念館  
電話 0883 9332 64330  
フックス 0883 9332 64331

格闘の末に高田が生み出した肖像は、モデル  
の内面を如実に物語るだけでなく、高田自身  
の精神の集約であり、思索そのものでした。

今私は（中略）もう一度中原の首を作って  
いる。あれから三十年たったから、すこし  
はましなものができると思いながら、中原  
は誰に向かっても先輩だった。私にとって  
も先輩である。

（朝日新聞社「人間の聲」より、中原中也）

長い時を経て再びつくられた中也像には、  
フランス生活を通して記憶の中の中也を見つ  
め直した「彫刻家の想いが込められていると  
いえるでしょう。展示会場では、昭和5年作  
「中原中也像」の写真版と、昭和33年作「中  
原中也像」とを並べ、来館者の皆様に両者を  
比較していただきながら高田と中也の友情の  
軌跡を感じ取っていただくよう展示しまし  
た。

4月7日	詩のボクシング山口大会本大会 (於 ばるるプラザ山口) ゲスト:清水ミチコ チャンピオン:前川和雄	9月8日	中原中也の会第3回セミナー (於 ホテルニュータナカ及び中原中也記念館) 小講演及び展示解説 佐々木幹郎「二つの中也の首 彫刻・高田博厚の極限のフォルム」
28日	中原中也記念館運営協議会 (於 ばるるプラザ山口)	10月2日	小企画展 「長男文也、誕生のころ」(～10月27日)
	第7回中原中也賞贈呈式及び記念企画 (於 ばるるプラザ山口) 受賞詩集 日和聡子『びるま』(私家版) 記念企画「中也を民謡で唄う」 出演:伊藤多喜雄、佐々木幹郎	22日	中也命日・墓参り
	第6回中原中也賞英訳本詩集贈呈 アーサー・ピナード『釣り上げては』	23日	企画展に先立ち、寄贈資料『療養日誌』を報道公開。
29日	中原中也生誕祭「空の下の朗読会」 (於 中原中也記念館前庭) 出演:小室等、伊藤多喜雄 他	30日	企画展 「丘の上サあがつて 中村古峡と中原中也」(～11月24日) 山口市表彰感謝状授与(千葉・中村古峡記念病院へ) (於 中原中也記念館)
5月29日	小企画展 「山口の歌人 小川五郎」(～7月28日)	11月9日	公開講座 曾根博義「漱石・古峡・中也」 (於 ホテルニュータナカ)
6月8日	中原中也の会第6回研究集会「宮沢賢治と中原中也」 (於 東京・日本近代文学館) 総合司会:鈴村一成 対談:中村稔「いんげん」 「銀河鉄道の夜(賢治)」と「夜汽車の食堂(中也)」をめぐって 集中討議:入沢康夫×北川透 「心象スケッチ と 名辞以前をめぐって 中原中也から見た宮沢賢治」	27日	小企画展 「加藤曙見書作展 私の上に降る雪 中原中也を書く」 (～1月26日)
7月31日	特別展 「二つの中也の首 彫刻家・高田博厚の極限のフォルム」 (～9月29日)	12月7日	中原中也記念館運営協議会 (於 ホテルニュータナカ) 中原中也記念館展示検討委員会 (於 ホテルニュータナカ)
8月31日	「中原中也研究」第7号発行	2003年	
9月7日	中原中也の会理事会(於 ホテルニュータナカ) 中原中也の会第7回大会(於 ホテルニュータナカ) シンポジウム 「中原中也・故郷と信仰」 パネリスト:笠原芳光、倉橋健一、山本哲也 司会:二木晴美 講演 加藤周一「中原中也と高田博厚」 佐藤泰正「近代文学とキリスト教 中原中也の位置」	1月11日	中原中也の会理事会 (於 東京・東京ガーデンテラス)
		29日	小企画展 「大正末期から昭和初期の文芸雑誌」(～3月30日)
		30日	和田健氏より歌集「未黒野」、 アルバム「中也詩碑設置」の寄贈を受ける。
		2月18日	開館9周年(同日無料開放)
		22日	第8回中原中也賞選考委員会(於 西村屋) 受賞詩集 中村恵美『火よ!』
		23日	中原中也記念館展示検討委員会(於 ホテルニュータナカ)
		3月31日	「中原中也記念館館報」第8号発行 新収蔵庫完成



小企画展  
「加藤曙見書作展  
私の上に降る雪 中原中也を書く」

・「23年前に教科書で読まれた」とまじりかかつた小舟の中で船頭がその女房に向かって何かを云つた。 その言葉は、聞き取れなかった。浪の音がひときはきこえた。「心象」というのがまだ残っています。」 5月 Sさん

・「私のおこがれの中也のふるさと山口にやってきました。今まで来られなかったけど、ここで生まれ育つたのだと思うと今日ここに来て本当に良かったと思います。彼の作品を今まで読み続けてきましたが、ふるさとに対する彼の思いを改めて深く知りました。」 8月 Yさん

・「初めて中を拝見しました。学校の授業でしか知らなかった中也を一步踏み込んで知ることができました。詩集を今一度読み直してみます。」 10月 Uさん

・「高校生の頃、今から20年前か…。教科書に載っていた「月夜の浜辺」にショックを受けて以来、今でも中也の詩はほとんどそらんじています。今日はやっとここへ来ることができました。感無量。」 11月 Kさん

・「あなたの事が大好きでした!! 夢の中にまで出て来て驚きました。おこがれの中也様。」 11月 無記名さん

・「放浪の途中、中也の詩を知った。ここに来たくなった。来てよかった。」 11月 Tさん

・「香川で中国国語教師をしています。先日「月夜の浜辺」の研究授業を行いました。この中也の世界をどう伝えればよいのかと、再び考え込んでしまいました。」 無記名さん

・「この場所に出会えてよかったです。あなたの事が好きになりました」 Nさん

# 自分詩ゆあ〜んより

記念館エントランスに設置されている「自分詩 ゆあ〜ん」には、記念館を訪れてくださった方々が思い思いの言葉を記念に記していかれます。ここでは、そのいくつかを紹介させていただきます。

## Memorial note

### 開館9年目

## 入館者数35万人突破

平成14年9月18日、記念館は開館以来35万人目の入館者を迎えました。平成6年2月18日の開館以来、8年7カ月での達成となりました。35万人目となったのは、山口市内在住の三本八重さんです。「詩が好きで興味はあったのですが、いつでも来られると思うと近くに住んでいながら初めて訪れました」と話しておられました。福田百合子館長から記念品が贈られ、中也の義妹・中原美枝子さんからも中原中也の写真が贈られました。

右より中原美枝子さん、福田百合子館長、三本八重さん



第8回中原中也賞

『火よ!』中村恵美めぐみさん



Chuya  
Nakahara  
prize

平成13年12月1日から平成14年11月30日までに刊行された現代詩の詩集3冊(うち推薦作品23冊、応募と重複16冊)が寄せられ、平成15年2月22日、応募作品の中から最終選考作品として選んだ7詩集を対象に、山口市内の旅館西村屋で選考会が開催された結果、第8回中原中也賞には、中村恵美さんの『火よ!』(書肆山田)が選ばれました。

受賞作『火よ!』に収められた作品は、対象に作者が問いかけ、その問いからイメージを引き出し、次々にイメージを変化展開させて、柔らかな構造体としての対象の本質を明らかにしています。この作者の独自性が中原中也賞を贈るにふさわしいと評価されたのです。

中村さんは「受賞したことに驚いていません。大学在学中に現代詩を知り書き始め言葉によって世界を立ち上げていくという喜びを感じながら詩作をしています。この詩集に光を当ててくださったことに感謝します」と受賞の喜びを語られました。

第9回中原中也賞

作品募集

【対象】

平成14年12月1日から平成15年11月30日までに刊行された現代詩の詩集(奥付の刊行年月日による)

【応募締切】

平成15年12月16日(当日消印有効)

【正賞】

受賞詩集を英訳本として出版します。

【副賞】

100万円

【選考委員】

荒川洋治  
井坂洋子  
北川透  
佐々木幹郎  
佐藤泰正  
中村稔  
五十音順

【応募方法】

著者本人が、同じ詩集を三部送付してください。また、「中原中也賞応募」と明記の上、本名、郵便番号、住所、電話番号を記入したものを添付してください。



送付先

〒753-0056  
山口市湯田温泉一丁目11-21  
中原中也記念館気付  
「中原中也賞事務局」 行

【発表】

平成16年(2004年)2月の選考会終了後、報道機関を通じて発表します。

◎平成15年度 記念館行事予定◎

2003年4月—2004年3月

4月29日	中原中也生誕祭「空の下の朗読会」 (於 中原中也記念館前庭)	9月 3日	企画展「青いソフトに 北原白秋と 中原中也」(～10月13日)	10月22日	中也命日・墓参り
5月28日	小企画展「追悼 伊藤拾郎展」 (～7月27日)	6日	中原中也の会第8回大会 (於 山口市)	12月 1日	展示リニューアルのため休館 (～2月21日)
31日	中原中也の会第7回研究集会 (於 彩の国さいたま芸術劇場)	7日	第4回セミナー(於 山口市)	2004年	
7月30日	小企画展「中原中也～和本デジタル 文庫～」(～8月31日)	10月15日	小企画展「四谷花園アパート時代 竹田鎌二郎日記より」 (～11月30日)	2月18日	開館10周年
				22日	展示リニューアルオープン